

第8回
西予市せいよし
お伊ネ賞
事業

第8回西予市お伊ネ賞事業表彰式



日本医師会
女性医師支援シンポジウム
～復興元年 もっと元気に もっと素敵に～

令和元年11月30日(土)12:50 西予市宇和文化会館 大ホール

主催／愛媛県西予市
公益社団法人日本医師会
一般社団法人愛媛県医師会

後援／厚生労働省・愛媛大学医学部・愛媛県
西予市医師会・ドイツシーボルト協会
愛媛新聞社・NHK松山放送局・南海放送
テレビ愛媛・あいテレビ・愛媛朝日テレビ(順不同)

○西予市お伊ネ賞事業

趣旨

シーボルトの娘で日本初の産科女医「楠本イネ」を育んだまちとして、医学研究や医療活動に躍進する女性を表彰し、奨励することで西予市の全国発信とともにお伊ネのまちづくりで地域の活性化を図る。

目的

女性医師を奨励し、社会における女性活躍躍進へつなげる。
活躍が期待できる地域における女性医師を奨励する。
これから芽が出ようとする地域における女子医学生を奨励する。

次 第

第1部 第8回 西予市お伊ネ賞事業表彰式

12時50分～

1. 開会
2. 主催者あいさつ
3. 西予市お伊ネ賞受賞者発表
4. 審査機関紹介及び審査総評
5. 祝辞及び来賓紹介
6. 表彰状贈呈
7. 受賞者あいさつ
8. 閉会



「読書をするイネ」

写真：大洲市立博物館所蔵

第2部

日本医師会 女性医師支援シンポジウム

～復興元年 もっと元気に もっと素敵に～

14時00分～

I 市民講座

座長：日本医師会 常任理事 平川 俊夫

こばやし ひろゆき

講師：小林 弘幸氏

順天堂大学医学部 教授

東京都医師会 理事 / スポーツ庁参与

演題：健康の正体

～自律神経と腸内環境を整えて毎日元気！～



★内 容★

病気になるかなんかたたくない。誰もがそう思っています。

病気になりやすい人となりにくい人の違いはいったい何によるのか？

私が繰り返しご説明している機能は「自律神経」です。

今回「健康の正体」とは何か、研究成果と事例を挙げ、ゆっくり生きることの重要性を説明します。

★プロフィール★

1960年埼玉県生まれ。92年、順天堂大学大学院医学研究科(小児外科)博士課程を修了。ロンドン大学付属英国王立小児病院外科、トリニティ大学付属医学研究センター、アイルランド国立病院外科勤務を経て順天堂大学医学部小児外科講師・准教授を歴任、現在に至る。各種研究の中で自律神経バランスの重要性に着目し、日本初の便秘外来を開設した腸のスペシャリスト。多くのトップアスリートのコンディショニング、パフォーマンス向上指導にも研究成果が活用されている。自律神経研究の第一人者として著書多数。代表著書「長生きみそ汁」など、そのほとんどがベストセラーを記録し、著書累計出版部数1200万部を超える。

II 基調講演

よこくら よしたけ

講師：横倉 義武氏

日本医師会 会長

演題：健康な社会を作ろう



★内 容★

人生100年時代、生涯を通じて健やかに過ごすためには、予防に取り組み、病を防ぐことも、医療の大きな役割となる。

かかりつけ医が地域でそういった役割を果たせるよう、医師会としても、引き続きその能力の維持・向上に向けた取組を推進していく。

★プロフィール★

福岡県生まれ。昭和44年久留米大学医学部卒業。同年久留米大学医学部第2外科助手となる。昭和52年久留米大学医学博士号取得。同年10月西ドイツ ミュンスター大学教育病院デトモルト病院外科に留学。昭和55年久留米大学医学部講師となり、平成2年には医療法人弘恵会ヨコクラ病院院長に就任。平成18年に福岡県医師会会長となる。平成24年に第19代日本医師会会長に就任し現在に至る。

また、平成29年には日本人で3人目となる第68代世界医師会会長に就任した。

III パネルディスカッション・総括

座長：愛媛県医師会 会長 村上 博

テーマ：医療界の男女共同参画～女性医師の働き方～

パネリスト



第4回お伊ネ賞受賞者
(全国奨励賞)
東京慈恵会医科大学
臨床検査医学講座 講師

越智 小枝



第4回お伊ネ賞受賞者
(地域奨励賞)
医療法人社団 みのり会
老人保健施設 みのり園
施設長

樋口 志保



第3回お伊ネ賞受賞者
(医学生奨励賞)
愛媛大学医学部附属病院
総合診療科
西予市立野村病院 内科 医師

菊池 明日香



第8回お伊ネ賞受賞者
(全国奨励賞)
熊本大学病院
地域医療支援センター
特任助教

後藤 理英子



第8回お伊ネ賞受賞者
(地域奨励賞)
愛媛大学大学院
医学系研究科
小児科学講座 教授

江口 真理子



第8回お伊ネ賞受賞者
(医学生奨励賞)
愛媛大学医学部
医学科 5年

武田 遥奈

主催者あいさつ



西予市長 管家 一夫

木々の葉も木枯らしに舞い、霜や息の白さに冬の訪れを感じる向寒のみぎり、第8回西予市おイネ賞事業の開催にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

先月は、関東・東北地方を中心に台風19号による甚大な被害が発生しました。昨年の豪雨災害からの復興を目指す私たちにとって、決して他人事ではなく、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

本市では、発災以降大変多くの皆様から、心温まるお見舞いのお言葉やご支援を賜りました。およそ170年にわたり途絶えることのなかった「乙亥大相撲」も開催することができ、「朝霧湖マラソン」には、少しでも力になりたいと全国各地から多くのランナーに出場いただきました。まちは、徐々に元気を取り戻しておりますが、復旧、復興は道半ばですので、引き続き温かく見守っていただきますとともに、ご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

さて、シーボルトの娘、イネの偉業を継承し、その志を受け継ぐ全国の女性医師を奨励する「西予市おイネ賞事業」は、おかげさまで8回目を迎えます。

女性活躍が様々な分野で求められている昨今、イネゆかりの地である本市で、今回も主催者としてご支援いただきます日本医師会様、愛媛県医師会様をはじめ、多くの関係者の皆様に参画いただき、社会における女性の活躍推進を図り、優秀な人材が年齢・性別にとらわれず活躍できる環境づくりを後押しする事業として開催できますことを心から厚くお礼申し上げます。

女性活躍さきがけの魁であるイネの生涯に想いを馳せますと、苦難の時代でありながら、夢や目標に向かって志高く進んでいく女性、自らの意思を貫き通した女性をイメージしますが、災害からの復興に向けて、「やらんといけん」という強い思いを持って歩みを進める市民に重なるものがあるように感じております。

おイネ賞が、苦難に立ち向かいながらも前を向き歩み続ける人たちにエールを送り、一人一人が活躍できる社会づくりに寄与できる事業となりますよう祈念するとともに、本事業の開催にご尽力賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

主催者あいさつ

公益社団法人 日本医師会

会長 横倉 義武



昨年7月の豪雨で犠牲になられた方々、被災された多くの皆様に改めてお悔やみとお見舞いを申し上げます。

元号が令和に変わった今年、復興元年を掲げ、昨年の西日本豪雨での甚大な災害からの復旧に努められ日常を取り戻しつつあると伺っており、第8回西予市お伊ネ賞事業を開催されますこと、心よりお喜び申し上げます。

日本医師会はお伊ネ賞事業の趣旨に賛同し、第3回より共催団体として参画させていただき、全国奨励賞の推薦をさせていただいております。また、第6回から西予市お伊ネ賞事業とのタイアップにより、日本医師会女性医師支援シンポジウムを開催させていただいており、今回も引き続き開催できますこと、深く感謝申し上げます。このシンポジウムが、女性医師支援を通じて、医療とまちづくりを考える一助となり、健康な社会を作る契機になれば幸甚でございます。また、本日お伊ネ賞を受賞者された3名の方をはじめ、これまでの受賞者の皆様のますますのご活躍と、お伊ネ賞事業の更なる発展を祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

一般社団法人 愛媛県医師会

会長 村上 博



西予市宇和町（卯之町）は、愛媛県でも最も文化的に成熟した街のひとつです。医師であり蘭学者であった高野長英も卯之町で幕末の歴史を切り拓く端緒を養いました。江戸時代末期、シーボルトの娘である楠本伊ネは、シーボルトの弟子になる二宮啓作を頼り卯之町で医学研修を行い偉大な足跡を遺しました。西予市が、この史実を世に知らしめ、女性医師の活躍を顕彰する事業を始めて8年目です。当初は愛媛県内の小さな事業でしたが第3回から公益法人社団法人日本医師会の共催を得ることで全国的なイベントに成長しましたが、発足からの理念は受け継がれ、子育てをしながら困難を乗り越えて地域医療に絶大な貢献をした女性医師や将来を担う模範的かつ意欲的女子医学部生に光を当てるものです。

社会がその担い手として広く女性医師を受け入れ、男女共同参画社会の時代を越え、現代のテーマでもある働き方改革、よきワークライフバランスのモデルとして、この「西予市お伊ネ賞事業」を位置付けたいと考えます。

昨年7月の西日本豪雨災害から1年と4か月が経過しました。関係者の皆さま、それぞれのお立場で被災地の復興にご支援を頂戴し感謝申し上げます。西予市も復旧・復興の真ただ中にいます。県内の被災地では住宅の再建を望む世帯のうち約6割では転居のめども立っていない、今なお仮設住宅住まいなど、地域住民にとっては未だ復興は道半ばであります。引き続きのご支援・ご協力をお願いいたします。健康であること長寿であること、まちづくりに関して医療が果たすべき役割があると思っています。元号も令和に変わり「～復興元年 もっと元気に もっと素敵に～」みなさんといっしょに考えてみたいと思います。

ご挨拶

ドイツシーボルト協会 名誉理事長
ウォルフガング クラインラングナー 様

ドイツシーボルト学術基金理事
ハルトムート オ。ローターモンド 様



Wolfgang Klein-Langner
ウォルフガング クラインラングナー



Hartmut O. Rotermund
ハルトムート O. ローターモンド

SIEBOLD-GESELLSCHAFT SIEBOLD-WISSENSCHAFTSSTIFTUNG

シーボルト協会



毎年、お伊ネ賞の授賞式が西予市によって実行される事は、我々にとっても大変喜ばしい伝統となりました。この賞が、日独友好関係に偉大な貢献をもたらした、Philipp Franz von Siebold の娘の名である事は、さらに、我々の誇りとするところです。

今年、シーボルトの二度目の日本滞在から丁度160年にあたる、記念の年でもあります。160年前の、その年は、シーボルトにとっては、彼の娘との故意でない長いあいだの離別後の再会の年でもありました。と同時に、シーボルトはその時、彼の念願でもあった、西洋の水準に該当する助産婦専門教育を娘が立派に体得した事を確認できました。現在に至るまで、西予市がその業績を高く評価している事は、誠に喜ばしい事であります。

故に、今年を受賞者への祝意と同時に、これからの、大いなる活動の成果を心から期待します。

シーボルト協会名誉理事長
Wolfgang Klein-Langner

シーボルト学術基金理事
Hartmut O. Rotermund

お祝いメッセージ



第5回西予市お伊ネ賞受賞者(全国奨励賞)

医療法人いぶき会 針間産婦人科 院長 **金子 法子 様**



★プロフィール

平成元年、川崎医科大学卒業。
同年、山口大学医学部産婦人科学教室に入局。
その後、国立下関病院（現関門医療センター）、山陽中央病院、山陽小野田市民病院勤務を経て、平成10年に針間産婦人科副院長、平成13年院長に就任し産婦人科医としての研鑽を積みながら、地域医療へ貢献している。
平成19、20年度の2年間は、厚生労働科学研究費補助金「回復人工妊娠中絶の防止に関する研究」班メンバーを務め、現在は日本産婦人科医会医業推進委員会を任務。
日々の診療に携わる一方で、精力的に性教育・避妊教育・人権教育・女性の健康教育等の講演活動を行っていると同時に、若年妊娠、虐待、レイプ等行政と連携しながらサポート活動に力を注いでいる。
また、お伊ネ賞受賞後は、地元の小児科医、僧侶、企業と共に「みんなや食堂」を運営するなど、安心して笑顔でいられる地域での「居場所作り」にも注力している。

西予市お伊ネ賞受賞者の皆さまへ。お伊ネ賞受賞の矜持とともに。

第8回お伊ネ賞受賞の皆さま、本日は誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。今、受賞席に座り、プログラムを見ながらどんな気持ちでいらっしゃるでしょうか。私が2016年に第5回全国奨励賞を拝受してから早、3年の月日が経ちました。それまでの受賞者である各大学の教授や研究者といったグローバルな先生がたに対して、私は産婦人科医として地域でずっと根を下ろしている町医者です。日本医師会から受賞の知らせの封筒を開けたときの衝撃と手の震えの感覚は、今も鮮明に覚えています。授賞式までの日々、お伊ネさんのことについて色々学んでみると、私の住む山口県とも縁が深いことも知りました。長州藩出身の大村益次郎が、お伊ネさんの父、シーボルトの門下生であり蘭学者の二宮敬作に会うために宇和島に渡り、宇和島藩に気に入られ、結果、二宮とともに長崎に同行し、お伊ネさんを紹介され蘭学の基礎を教えることになりました。益次郎が襲撃され、最期を看取ったのはお伊ネさんでした。こうしてみると志を持った人たちのご縁というのは不思議なもので、医術開業試験の門戸もお伊ネさんが57歳になるまで、女性には開かれなかったため、医学と蘭学を二宮敬作と大村益次郎という二人の偉大な人物から学びつつも「医者」という資格はもらえなかった、それでも生涯を産婆として、たくさんの命に寄り添って来た人生に敬意の念が絶えません。そんなお伊ネさんを称えてのお伊ネ賞を受賞するという喜びと重みを、今もずっと心の真ん中で感じています。

お伊ネさんの偉業を思いながら、私の仕事の信念は？と自問すると、一言で表すと「生き辛さを抱えた方たちへの理解と寄り添い」ではないかと思えます。もちろんそれが実現されているかどうかは、まだまだ自信はありません。世の中では「多様性を認める社会に」と、色々な場面で叫ばれていますが、長い間、産婦人科の町医者として地域の皆さまとともに歩んでいると、たくさんのことが見えてきました。予期せぬ若年妊娠と出産、母子家庭の貧困、虐待、レイプ、居場所のない子供たち、ハンディキャップを持った方への理解、、、みんな声を上げにくく弱い立場です。そしてそれらは孤立したものでなく、どこかで繋がっていることが多々あります。私は地域に向いて性教育や人権について話し、共に学んでいくことを長年続けています。そして町医者としての最大の強みは「顔が見える」ということです。医療だけでできることには限りがあります。日ごろから行政や学校の先生がた、NPO、地域の皆さまとお会いし話す機会を設けることで、ひとつひとつの困りごとを解決する方法が広がります。この大人になら頼っていいんだ!と思える人たちのネットワークを築いていくというのは一朝一夕ではできませんが、どんな時代でも「会って話す、そして傾聴する」という繰り返しが世の中を少しずつ変えていくのではないのでしょうか。そしてお伊ネ賞受賞後、新たに始めたことがあります。地域の居場所作りを目指して、共生の中での貧困対策(貧しいという意味と困りごとを抱えているというどちらもが貧困であるという考え)として、地元の小児科医、僧侶、企業の皆さんと共に「みんなや食堂」の運営をしています。月二回、無料で子どもに限定せずに季節の食事を提供し、たくさんの親子、独居高齢者など毎回300人以上の方が来訪します。これも皆で手を携わりながら安心して笑顔でいられる居場所作りのひとつではないかと思っています。

お伊ネさんはこれからも私の目標であり支えです。皆さまにとっても、お伊ネ賞は、自分の生き方に襟を正す、医師として人間としての矜持となるでしょう。最後になりましたが、この事業を続けて来られている、暖かい気候そのものの西予市の関係者の皆さまのご苦勞とおもてなしに心より敬意を表し、受賞者の皆さまのますますのご活躍を祈念してお祝いのご挨拶とさせていただきます。

第8回 西予市お伊ネ賞受賞者紹介

「全国奨励賞」



熊本大学病院
地域医療支援センター 特任助教

ごとう りえこ
後藤 理英子 氏



2001年熊本大学医学部を卒業。2001年に熊本大学医学部附属病院糖尿病・代謝・内分泌内科に入局。その後、国立病院機構熊本医療センターのレジデント、2004年に熊本大学医学部附属病院糖尿病・代謝・内分泌内科研究員、2006年に熊本大学医学部附属病院糖尿病・代謝・内分泌内科医員、2010年に熊本大学医学部生命科学部代謝内科学大学院（長期履修）を経て、2014年に熊本大学医学部附属病院地域医療支援センター特任助教に就任。2人の子育てをしながら臨床、研究の仕事を継続し、その経験を活かし、熊本県女性医師キャリア支援センターや熊本大学病院において男女共同参画を推進し、女性医師・女性研究者が能力を発揮できるための環境づくりに尽力している。

「地域奨励賞」



愛媛大学大学院 医学系研究科
小児科学講座 教授

えぐち まりこ
江口 真理子 氏



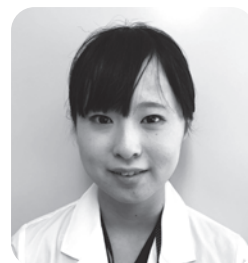
1991年、広島大学医学部医学科卒業、1996年、広島大学大学院医学系研究科病理系専攻修了（医学博士）。広島大学附属病院、国立小児病院、英国がん研究所、獨協医科大学を経て、2008年4月に愛媛大学医学部附属病院に講師として着任、2011年から愛媛大学大学院医学系研究科小児科学講座の准教授として、附属病院における診療や臨床遺伝専門医の指導責任医として後進の育成にあたるほか、学生教育等にも携わってきた。2019年5月に同講座の教授に就任し、これまでの活動に加えて医局の運営等にも取り組んでいる。研究・および診療面においては、血液疾患の特に小児白血病については世界的な業績を上げ、また最新のゲノム医療にも精通し附属病院の臨床遺伝医療部の遺伝子診断や遺伝カウンセリングで活躍。子育てをしながら女性医師として働くモデルでもあり、女性が働きやすい職場づくりにも積極的に携わってきた。

「医学生奨励賞」



愛媛大学医学部 医学科 5年

たけだ はるな
武田 遥奈 氏



愛媛県今治市出身

現在愛媛大学医学部の5年生で、臨床実習などの勉学に励んでいる。学業成績は優秀で、臨床実習前の共通試験では学年でトップである。またサークル活動においては卓球部と奇術部に所属し、仲間からの信頼も厚い。さらに医学研究面では、学業や実習を行いつつ生理学教室にて、「睡眠薬の神経細胞（ミクログリアやニューロン）に対する作用」をテーマに研究を継続し、日本生理学会で研究発表も行っている。今治西高等学校から愛媛大学に進学し、愛媛の医療を担う一人として将来の活躍が期待される。

